日本アメリカ史学会　第52回例会報告

合評会　廣部泉『人種戦争という寓話：黄禍論とアジア主義』（名古屋大学出版会、2017年）、同『黄禍論：百年の系譜』（講談社、2020年）

日時：2021年12月18日（土）14：00～17：00

会場：オンライン開催（ZOOM）

概要：

　第52回例会は、廣部泉氏の2冊の近著の合評会として企画・実施された。二作品に共通する特徴として、外交政策決定をめぐる政府資料のみならず、日・米・欧・豪などの同時代書籍や主要紙誌をも渉猟した、外交史研究および人種意識研究の両面を兼ね備えた研究成果となっている点が挙げられる。それを意識して、本例会では、まず著者の廣部氏に、出版に至る経緯や問題意識などについて報告していただき、次に現代史、日米関係史、表象研究の見地から、油井大三郎氏、中嶋啓雄氏、橋本順光氏にそれぞれコメントしていただいた。

油井氏は、アメリカ外交史において従来軽視されてきた人種的要素の解明を試みたことについて高く評価する一方、第一次世界大戦の戦前と戦後における「黄禍論」のもつ質的な相違（人種論的要素と文明・文化論的要素）により一層注目することで、黄禍論を複眼的に見ることの重要性を強調された。この論点は第一次世界大戦後の「新外交」をどのように評価するかという点にも連動しており、そのことについては次の評者である中嶋氏が、マルチアーカイバルな研究手法に裏打ちされた国際史としての性格を高く評価しつつ、新外交（国際主義）に潜む人種主義の存在を強調するマーク・マゾワーの研究成果を取り入れることによる、「黄禍論」研究のさらなる深化可能性について指摘された。橋本氏は、さまざまな小説家や思想家が生み出すテキストに内在する「黄禍論」や「アジア主義」に関する諸言説が、どのような社会的文脈のなかで発せられたのかという視点や事例を取り上げることで、人種をめぐる言説から、実際の人種に関する諸政策の実態を逆照射することの可能性について指摘された。

約50名ほどに参加いただいた総合討論においても、新外交をめぐる評価、カナダやオーストラリアの黄禍論の位置づけ、当事者の移民経験の影響の在り方などについても議論が及び、盛会に終わることができた。著者の廣部氏が試みられた「外交史と移民史の架橋」は、アメリカ史研究者にとっても、これからさらに発展させるべき課題になるように思われる。

文責　運営委員（池上）